

1. むらづくりの主体

- (1) 名 称 地域の農業を考える会
- (2) 所 在 地 はままつしてんりゅうく
浜松市天竜区両島 1 0 6 9 - 1
- (3) 地区の規模 集落
- (4) 組織の性格 その他（近隣地域における地元農家の有志）
- (5) 代表者の氏名、役職

氏 名 のざわ ま さ し
野沢 正司

役 職 会 長

2. 地区の概要

総 人 口	農業就業人口	総 世 帯 数	総土地面積	耕 地	採草放牧地	山 林	
22, 122人	470人	6, 867戸	18, 165ha	477ha	- ha	8, 399ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第Ⅰ種兼業農家	第Ⅱ種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
669戸	246戸 (36. 8%)	50戸 (20. 3%)	29戸 (11. 8%)	167戸 (67. 9%)	36戸 (14. 6%)	82戸 (33. 3%)	128戸 (52. 0%)
地 域 指 定 状 況				農 業 地 域 類 型 区 分			
昭和48年度 農振指定 都市計画 無				市 町 村		当 該 地 区	
				都市的地域		中間農業地域	

3 むらづくりの内容及び成果

(1) 地域の沿革と概要

【浜松市天竜区の概要】

「地域の農業を考える会」が活動する下阿多古地域は、JR東海道線浜松駅から北へ26kmほどに位置している。平成17年に3市（旧浜松市・浜北市・天竜市）8町（旧佐久間町・水窪町・春野町・舞阪町・雄踏町・細江町・引佐町・三ヶ日町）1村（旧龍山村）が合併して浜松市となり、平成19年4月からは、浜松市が政令指定都市となったため、天竜区（旧天竜市・佐久間町・水窪町・春野町・龍山村）に地名が変更された。かつて（昭和の大合併以前）下阿多古村とよばれた「両島」



「上野(かみの)」「青谷」集落周辺の地域である。

天竜区は、現在、94,386haの面積を有しており、県土面積の12.1%、浜松市の62.5%を占めている。天竜区の中央部を天竜川が縦断し、天竜美杉など豊富な自然環境に恵まれた中山間地域で、森林率は91%、人口は全県人口のわずか1%（約37,520人）を占めるにすぎない。高齢化が進み、天竜区の65歳以上の比率は35.8%と、都市部を含めた浜松市の比率21.5%をはるかに超えている。このうち人口の減少が著しい佐久間・水窪・春野・龍山地域は過疎地域に指定されている。

天竜区は、古くから豊かな森林資源を生かした林業・木材業が盛んであり、平成18年度には木材業者80社、素材生産額は18億2千万円に上り、林業関連産業を中心に発展してきた地域である。

区内の農地は約1,200haで、その半数以上を茶園が占めている。山岳地形の間を雄大な天竜川とその支流である阿多古川が蛇行し、川沿いの傾斜地にある一部の平地に農地が点在している。急峻な地形と山林に囲まれた厳しい自然条件の下、農家の地道な努力により、山間地の特色を生かした茶の生産や椎茸、自然薯、シキミ、チンゲンサイなどの野菜や花木、水稻などの栽培が行われている。

近年、担い手の減少や高齢化の進展により、区内の農業生産力は弱まっており、零細な経営規模で農業所得の確保が難しい状況である。下阿多古地域全体の活力も失われていき、農家をはじめ地域の住民たちも、どうしたらいいのか分からないまま時間ばかりが過ぎていった。

(2) むらづくりの動機、背景

ア「農業を考える会」設立の経緯

平成7年ごろ、定年退職して天竜に戻ってきた鈴木基次氏が目にしたのは、至る所に点在する耕作放棄地であった。これを何とかして活用できないかと考え、市や農業委員会などを頼りに高齢化と後継者不在のために農業を断念する地主から放棄田を借り受け、

新規就農者としてスタートした。見よう見まねで覚えた30aの米作り、最初は失敗の連続であったが、地元農家のアドバイスを受けながら徐々に要領を得るとともに、農業用機械や作業場などを順次整え、夫婦で1.6haの農地を耕作するまでになった。

しかし、80歳近くなると広い耕作面積の維持は、夫婦だけでは難しく限界となってきた。長年製材関係の仕事に就き、農業とも阿多古地区とも関係のない鈴木氏が、自己資金を投入し、真摯に農業に取り組む姿を見て、地元の人たちも何とか力になろうと呼びかけ、下阿多古の農家仲間12人と共に農作業に取り組むことを考えたのが、「地域の農業を考える会」発足のきっかけであった。鈴木氏が初代会長となり、平成13年に設立した。

イ 活動開始

会では衰退する一方の農業を維持するため、集落営農を主目的として、農作業受委託や荒廃水田の適正な管理と利活用、そして、子どもや孫たちに優良な農地を残すため、まずは荒廃した遊休地約40aを再生し、ヒマワリやコスモスなどの景観作物を栽培する活動を始めた。

平成15年、地元の野沢正司氏（浜松市天竜区農業委員会会長）が二代目会長となった。鈴木前会長の奥さんからの提案でみそ作りを始めることとし、約40aの遊休地であったところに大豆の植え付けを本格的に開始した。除草、収穫、みそ作りなど、全ての工程を会で行うこととした。大豆は無農薬栽培、みそは無添加で作った。特に、昔ながらのみそ作りは地域で話題となり、このみそ作りを契機に、活動に関心を持った地元農家らが会に新たに加わって、大豆栽培が始まった。

ウ 「みそ作り教室」

自分たちで栽培した大豆を使いみそ作りをする。女性会員の中から「昔ながらのみそ作りをもっと広めたい」と声が上がり、都市住民を対象とした「みそ作り教室」を、平成17年から始めた。ふだん、会合などは地域の公民館で行っていたが、みそ作りは鈴木氏が自ら作った加工場で行われた。教室は、ゆでた大豆を塩や米麴と混ぜ合わせる作業や、樽に詰める作業など2時間半ほどであるが、麴づくりや大豆の浸水などに要する準備作業もあり、多くの労力を必要とする。現在は、毎年1月下旬から3月上旬までの期間、毎週末約12回行っている。



みそ作り教室

平成17年は122名参加した。平成18年はみそ作りと地域の名所めぐりを実施し、44名（内40名は地域外）が参加した。平成19年は122名の参加と、28名参加によるこんにゃく作り教室を行い、平成21年からは、参加者からの要望に答え、平日にも実施している。

教室への参加者はリピーターが多い。会では、リピーターに呼びかけ「味噌造り会員」を募集し、大豆の定植や収穫といった農作業への参加を呼びかける案内や、みそ作り教

室開催の連絡を行っている。現在、「味噌造り会員」は83名の登録があり、25名は下阿多古地区であるが、その他は他地域からの会員であり、農村との交流を希望する都市部の住民だけでなく、忘れてしまったみそ作りをもう一度習いたい山間部の住民も参加している。

大豆の栽培面積は50 a、平成21年は600kgの収穫があった。

エ 菜の花栽培

会では、単なる景観作物の栽培（40 a）ではなく、さらに地域貢献するため、平成18年度、19年度に静岡県「菜の花定着実証モデル事業」と「菜の花の環拡大推進事業」に取り組んだ。菜種の収穫量調査、栽培技術の研究、資源を循環する仕組み作りを目的に、地元の下阿多古小学校や授産所、近隣の菜種栽培グループに協力してもらい菜の花栽培を行った。

菜の花畑は小学校の環境学習の場となり、翌年度は搾油した菜種油約100ℓが地元給食センターに寄贈され、給食として利用して子供たちにも喜ばれた。

さらに給食センターから廃油を回収し、市内授産施設のバイオディーゼル精製所でバイオ燃料化した。燃料は同授産施設車両や農作業トラクターに利用された。

事業は終了したが、給食センターに菜種油を提供する取組については、地元からの希望もあり、現在も続いている。菜種油の搾油等については、経費的に負担がかかるものであるが、近隣の浜北区の菜の花栽培グループから専用の農業機械の借用を受けたり、栽培に関する助言をもらったりして、取り組み続けている。

地域の住民が会の活動に期待しているとともに、会のメンバーもそれに応えようとする信頼関係があるからこそのことである。

（３）新たな交流「一社一村しずおか運動」

様々な活動を行っていた平成18年度、静岡県が推進する「一社一村しずおか運動」を活用し、市内建設コンサルタント会社と連携して活動を実施することになった。

一社一村しずおか運動は、農村と企業（その他団体や大学）が対等なパートナーシップを組み、双方の交流による地域活性化を促進することを目的とした運動で、静岡県が全国



菜種油利用の給食



「一社一村しずおか運動」
地域の農業を考える会とフジヤマの社員

に先駆けて推進した取組である。「人・情報・ネットワーク・技術」などお互いの得意分野を活かした活動に取り組んでいる。

浜松市の市街地に本社を置く株式会社フジヤマは、土木設計コンサルタントや測量を主たる業務とする社員250名の企業である。天竜区内で環境美化のボランティアを行っていたことがきっかけとなり県を仲人役として平成19年2月に協力活動の締結を行った。会員とフジヤマの社員の有志が参加して、大豆苗の定植・収穫作業や菜種播種作業、菜の花まつりの運営などを行っている。



菜の花まつり

大豆定植・収穫作業は、会員だけでは1日以上はかかる重労働である。しかし、フジヤマ社員30名と会20名、味噌造り会員10名が力を合わせて行うことで、作業時間は半日に短縮された。作業後に振る舞う味噌汁と家庭料理での交流も、女性会員のやりがいとなった。

また、毎年、地域の農業を考える会が主催する菜の花まつりなどで、加工したみそを使用した五平餅を販売している。ここでも、フジヤマの社員が売り子となり活躍してくれている。

農村の自然や農家との交流に加え、若い労働力を受け入れることで、高齢者と女性とのみの会に、新しい刺激が生まれ、会に活気が生まれた。

「一社一村しずおか運動」による取組は、地元新聞だけでなく、「食と地域を考えるフォーラム（JAアグリサポート・NHKエデュケーショナル・読売新聞社主催）」などでも優良事例として取り上げられ、企業側はCSR（企業の社会的責任）活動として広報されることが多い。イメージアップにも繋がっている。

（４）むらづくりの推進体制

ア 会の組織活動を拡充

平成20年から「農地・水・環境保全向上対策事業」に取り組むため、地域の農業を考える会の会員のうち荒れていない農地の所有者で、「下阿多古みのり会」を設立し、適正な農地管理を行うために用水清掃や草刈りを共同で行い、農地の美化に努めている。

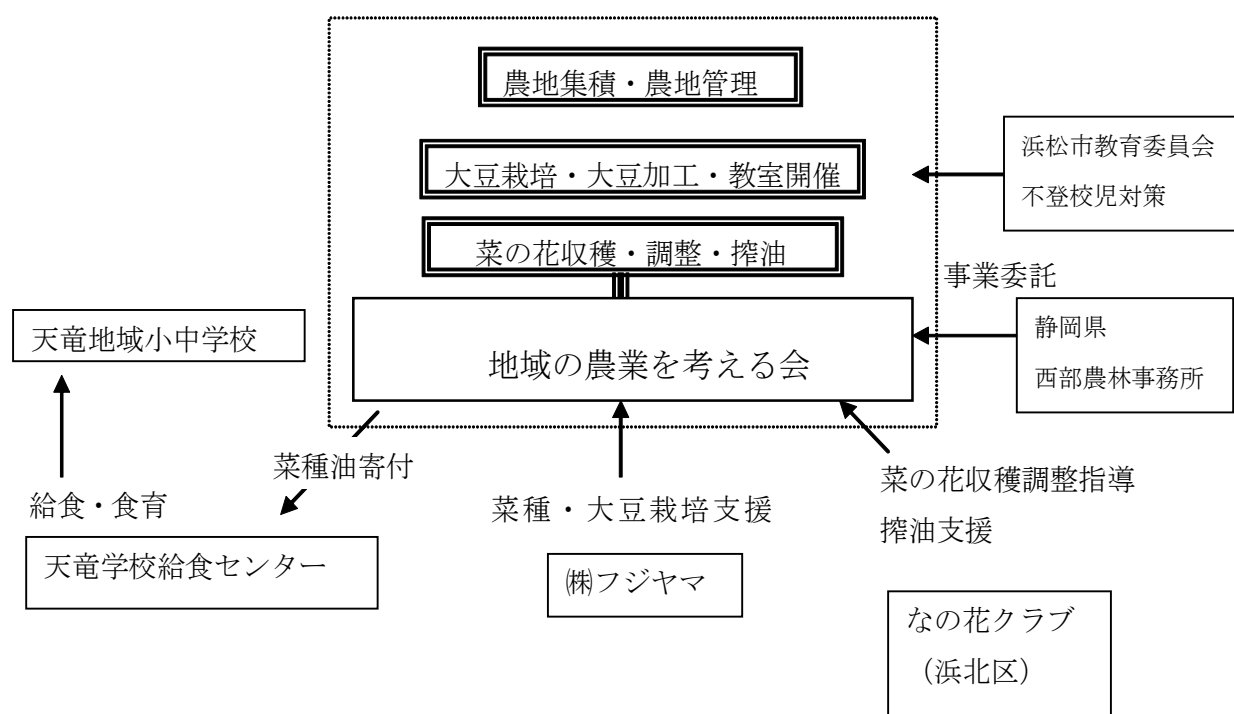
イ 菜の花と大豆を活かした地域振興

平成19年から、春に咲く菜の花畑において、毎年「菜の花まつり」を企画、実施している。会員が手塩にかけ育てた新鮮な農産物を販売し、周辺地域の農家らが花鉢、はちみつなどを販売している。平成21年からは、県グリーン・ツーリズム協会北遠支部に加入し、みそ作り教室のノウハウを活かして、天竜区内のグリーン・ツーリズム施設などと連携し、スタンプラリーへの参加、モニターツアーの開催、研修の開催などを行いながら地域活性化を図っている。

ウ 今後の連携

平成17年、会は「阿多古川流域における連携」をテーマにした県主催のタウンミーティングに参加した。同じ天竜区内の「道の駅くま水車の里」と上阿多古地域、下阿多古地域の連携や協力について考え、今後、共に交流の拡大や地域の活性化を図ることを視野に入れている。

推進体制図



(5) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

耕作放棄地対策への取組

下阿多古地域の農地面積約10haのうち、遊休化した農地を中心に、会員が2haほど利用権設定し、会としての活動として大豆栽培、菜の花栽培をしている。小区画、不整形な水田がほとんどであるが、借り受けた会員が少しずつ作業性がよいほ場に改善し、新たな耕作放棄地の発生を抑えている。

会では今後も、竹林の整備や新たな作物栽培を計画し、さらに、かつて牧草地として使われていた5haの耕作放棄地の解消に向けて、「一社一村しずおか運動」のパートナー企業の力を借り、測量や図面作成に取り組む予定である。

(6) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

菜の花を巡る取組

菜の花畑の取組が進み、給食センターでは菜種油を利用した野菜チップスを、地域の下阿多古小学校の献立のひとつとして導入した。また、菜の花循環の仕組みを理解してもらうための学習資料を提供し、給食センター職員による菜種栽培や地産地消などについて授業が行われた。

菜種油寄贈2年目には、市立清流中学校の給食でポテトシュガーに利用され、給食センターの職員による食育が行われた。

この活動は地元小中学校からの要望が強くあるため、子供たちに地域のことを知ってもらう良い機会として継続して取り組んでいる。

4. むらづくりの特色及び優秀性

(1) 持続できるむらづくりに向けて

高齢者と女性を中心となって運営する同会の活動は、集落の農業を維持することを主目的として始まったが、耕作放棄地の解消、みそ作り、菜の花栽培など、都市部との交流や地域間の交流、さらに企業との交流、と発展してきた。地道な活動が中心であり、大きなイベントや経費のかかる活動ではないが、浜松市中心地などから何度も加工場を訪れる「味噌造り会員」がおり、毎回30名ほどの企業社員が作業の協力に訪れる交流が実践されている。

こうした活動により、高齢化は進んでいるがむらづくり活動が持続でき、地域の中で資源を活かす取組を維持しているということが大きな成果である。

そして、何よりこうした活動が地区の高齢者の生きがいになっており、このことは地区の活性化に寄与するものとなっている。

(2) 一社一村しずおか運動の新たな展開

平成21年11月に、韓国政府農業関係者とマスコミによる視察訪問を受け入れた。静岡県の一社一村運動は韓国の「農村愛運動」をモデルにしている。韓国は農村と企業の協力が盛んで、本場韓国の関係者が、日本での取組の広がりを見学に来た。

この訪問が、会と協力企業の(株)フジヤマにとって刺激となり、韓国との交流を続けるため、会員の前向きな提案を受け、韓国農村地域への視察要望が持ち上がった。会では希望者を募り訪問を計画している。



韓国訪問団

(3) 今後の展開

会の発足から8年が経過し、今後も活動を継続していくためには、更なる交流の輪を広げ、新たな活動を創出する必要がある。後継者となる人材を発掘し、育成していくことも会の存続にとって重要な課題である。定年帰農者であるが、現在、認定農業者を目指す人が現れ、周りもサポートしているところである。

また平成21年度には阿多古地区が、浜松市教育委員会より、不登校児童・生徒を支える場として「ほっとエリア阿多古」と名付けられ、会が農業体験活動を行った。

今後、さらに、こういった活動が充実するとともに、耕作放棄地解消に向けた会の活動が期待されるところである。

